

涙の向こうにあった戦争

豊見城市立伊良波中学校一年 城間 一步輝

ぼくは去年の慰霊の日、沖縄全戦没者追悼式で詩の朗読をした。その場に立ったとき、ただ緊張していただけのはずなのに、祖母の顔を見た瞬間、涙が出そうになった。

「おばあちゃんから聞いた戦争の話を伝え続けていく。おばあちゃんが繋いでくれた命を大切に一生懸命に生きていく。」

読み終えて一礼したあと、祖母の方を見ると、ハンカチで涙をぬぐっていた。その悲しそうな表情は一生忘れられないだろう。祖母が誰にも知られたくないと隠し続けていた足の傷を題材にしたことで、本当にこれでよかったのかと、今でも考えてしまう。

詩が選ばれたことを伝えたとき、祖母は小さな声で言った。

「私が傷ものだと、みんなに知られてしまう。」

祖母の傷がただの過去ではなく、今も心の傷として残り続けていることを感じ、ぼくは言葉を失ってしまった。その時から祖母の前で詩を朗読することが出来なくなった。本番の日が近づき、あせっているぼくに、祖母は静かに言った。

「二度と戦争はしてはいけない。孫たちには、私みたいに苦しんでほしくない。だから、堂々と発表しなさい。」

その言葉を聞いたとき、ぼくの決意が固まった。祖母の痛みを引き受け、思いを伝えよう。伝え続けなければ、祖母が戦争で受けた苦しみがなかったことになってしまう。ぼくには伝え続ける責任がある。この思いが、命をつないでくれた祖母への恩返しになるかもしれないと思った。

そして今年のゴールデンウィーク、平和のメッセージを書く宿題が出た。ぼくは祖母の家に行き、携帯電話で祖母と一緒に戦没者の記録を調

べた。画面には無数の名前が並び、その中に祖母の父と弟の名前もあった。二人の生年月日を確かめながら、もし、二人が戦争の犠牲にならず、今も生きていたら何歳になっているのかを計算していると、祖母が言った。

「お父さんの顔も覚えていないのよ。この画面に写真がのつたらいいのに。」

家も焼かれてしまい、写真も残っていないこと、二人の遺骨さえ家族のもとに戻ってきていないので、お墓には二人が亡くなったであろう場所の石を拾い、納めていることを知った。戦争は、祖母の大切な家族を奪っていた。祖母の話を知っているとき、ぼくは何度も想像しようとした。もし自分が同じ時代に生まれていたら、家族と離れ、暗い防空壕の中で毎日を過ごすことに耐えられただろうか。しかし、どれだけ想像しても、その恐怖や不安は本当の意味では分からない。空腹やけが、そしていつ終わるのか分からない戦争の中で生きることは、ぼくの想像をはるかに超えていた。ぼくが今、何不自由なく学校に通い、大好きなバスケットを楽しんでいることが、当たり前ではない。その当たり前は、祖母たちが生き抜いてくれたからこそ続いているものだ気づいた。そして同時に、その命のつながりの中でぼくが生きている以上、過去を知るだけでおわらせてはいけないと思った。戦争の悲しさを忘れずに、同じことを繰り返さないために何ができるのかを考え続けることが必要だと感じた。戦争で失われた命に触れるたびに、それは他人事ではなく、自分の命のつながりの中にあるのだと感じた。そして、過去を知るだけで終わらせるのではなく、戦争を起こさないために自分に何ができるのかを考え続けることが大切だと思った。ぼくの将来の夢は、小学校の先生になることだ。祖母の話を忘れず、戦争の悲しさと平和の大切さを子どもたちに伝えられる先生になりたい。この思いは、これからも持ち続けていかなければならないと思う。

あの日、沖縄全戦没者追悼式の祭壇の前で見た祖母の涙の意味は、今もぼくの中で消えることなく生き続けている。